

校長室だより

共学共高

第
72
号

令和6年6月15日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

全校オンライン授業～その日に備えて

合唱コンクールの翌日にあたる6月14日（金）は、全校オンライン授業を実施した。本校ではコロナ禍において、Zoomを用いた同時双方向型のオンライン授業を確立し、感染者が拡大した際には、オンライン授業へ切り替えて、生徒たちの学びを確保する体制をとってきた。コロナは一定程度収束したが、まだなくなった訳ではない。そこで、校務分掌の一つである「教育研究部」が企画して、全校オンライン授業を年間2回実施することになっている。そのことによって、教員も生徒もオンライン授業のノウハウを忘れないように努めている。その様子をお伝えしたい。

朝のホームルームである。前日、学年で第1位に輝いた1年1組では、担任のS先生が、表彰状と共に素敵な装飾をして、待機している。時間になると「はい、おはようございます。みんなしっかり参加してくれていますね。昨日はお疲れ様でした。電子ボードに飾ったので見てください。」と言って、端末を手に持って装飾と表彰状をカメラで映し出す。音声は聞こえないが、生徒たちも喜んでいることだろう。S先生が「校長先生も来てくれています。」と紹介してくれたので、画面の前に行って手を振る。「昨日は学年第1位おめでとう。」と一言発すればよかったのだが、我ながら気が利かないものだ。

インターハイ東京都予選を控えているハンドボール部の生徒たちは、登校して多目的ホールでオンライン授業に参加している。自宅でオンライン授業に参加すると、練習時間が確保できないからだ。学年もクラスも異なるので、各自がイヤホンをして距離をとって授業に参加している。私が、「まるでハンドボール部の勉強合宿みたいだね。」と声をかけると、元気に笑っていた。



1年1組の朝のホームルーム



多目的ホールのハンドボール部

どの教室でも、教科担当の先生たちが当たり前のように授業を実施してくれている。非常勤講師の先生たちも、何事も問題ないかの如く授業を実施してくれていて、ありがたい限りである。

3年1組の論理国語の授業（担当N先生）にお邪魔したので、その様子をお伝えする。N先生の授業では、電子ボードの板書を映し出すために、手元の端末とは別に、教卓の前方にカメラ用の端末をスタンドでセットしてあるのが特徴である。電子ボードの教材の映像がすでに映し出されている。始業のチャイムが鳴ると、N先生は、「始めていきます。声が聞こえていたらハートマークを出してください。」と語りかける。生徒たちはリアクションボタンを押してハートマークを送る。次に「声の大きさと文字の大きさが大丈夫ならハートマークを、もっと大きくしてほしいときは挙手マークを送ってください。」と投げかける。大丈夫なようだ。

扱う教材は「鏡の中の現代社会」という作品だ。ちょうど、新しい単元に入るところで、まず目標の確認をする。目標は、「異国と現代社会の違いに着目し、筆者の考える『新しい社会のかたち』を理解する」だ。「日本と外国の価値観を比べてみて、よりよい社会をつくれるのではないか」ということのようなようだ。目標をノートテイクし終わった生徒たちが、リアクションボタンを押してくる。続いて、第1段落を音読又は黙読し終わったら、再び生徒たちはリアクションボタンを押す。御家庭の環境によって、音読できない場合への配慮がなされている。



3年2組の論理国語の授業



3年1組の論理国語の授業

電子ボードに第1段落の文章が映し出され、N先生が「異国で感じる不思議な魅力」と板書する。N先生が「みんなは時間とお金が自由だったら、どこの国へ行きたいですか？」と問うと、生徒たちはチャットで「イタリア、フランス、アメリカ、フィンランド、エジプト、タイ」などと回答する。総じてイタリアが人気のようだ。この後、本文に出てくる「メキシコ、インド」は挙がらなかったが、N先生は「私はメキシコに行きたいです。」と伝える。続いて「外国へ行ったことのある人は、どれくらいいますか？」と問うと、10人くらいのハートマークが返ってくる。ここで本文の内容に触れる。

「自分自身を知ろうとするとき、人間は鏡の前に立ちます。」「全体としておかしくないか、見ようとするときは、相当に離れた所へ立ってみないと、全体を見ることはできない。」「自分の生きている社会も同じです。」と書かれている。M先生は、そこを整理するために、ノートを二分して記載するように指示して説明・板書をする。上段に「(自分自身では見られない) 自分の姿⇒鏡⇒全体を見ることができる」と順に書き進める。下段に「自分の生きている社会」⇒離れた世界⇒あたりまえでないものに見える(異化効果)⇒自明性の罍からの解放」と書き進めていく。

N先生の経験から「あたりまえでないものに見える」ことの例が示される。「日本の飲食店では水やお茶が無料で出てくるのが当たり前ですが、イタリアの飲食店では出てきませんでした。メニューに水が載っていて、1リットル1000円くらいでした。水は買うものなのです。」「イタリアでは、バスの運転手がたばこを吸って休憩するために30分くらい停車することがあります。それでも観光客は文句を言わず、周囲の景色を楽しんでいます。」

また、「異化効果」についても、「漬物屋のポスター」を画像で示す。そこには、野菜の立場になったコメントが書かれている。つまり、「何度も何度も氷水に沈めた」「一か月間、暗闇に監禁した」といった具合だ。面白い発想だが、日常のものをちょっと違うように見せる好例だ。さらに、思い込みによる誤った認識が「自明性からの罍」であり、「自明性からの解放」とは、あたりまえとと思っていることが世界共通ではないことに解放される」こ

とを生徒たちは押さえていく。こうして授業が進められていく。

オンライン授業に初めて参加した複数の1年生が、感想を寄せてくれたので紹介する。

- ・ 動画を共有されると、音が聞こえなくなって分かりにくくなるので、リンクを貼った方が後で振り返ることもできて分かりやすいのではないか。
- ・ 普段の授業より理解しづらいが、登校せずに済むのは楽である。
- ・ 穴埋めのところでわからないまま進んだところがあった。普段はすぐに友達に聞けるが、リモートではそれができないので、授業が終わってから友達に聞いて対応した。
- ・ ブレイクアウトセッションで対話に参加しない人もいたので、対面授業の方が、直接いろいろな人の意見が聞けてよい。
- ・ 普段授業中は家にいないが、愛犬と関わる機会もあった。

率直な感想を聞くことができた。やはり、対面授業の大切さやありがたみを感じた生徒も多かったのではないだろうか。先ほどご紹介した論理国語の授業内容ではないが、「あたりまえ」だと思っていた学校の教育活動が「あたりまえではなくなった」のが、コロナ禍であった。私も二度と体験したいとは思わない。しかし、備えておくことも必要だ。今日も校内を巡回したが、生徒のいない学校はやはり寂しい。私が授業の様子を見るために巡回していると、目と目が合って会釈をしてくれたり、微笑んでくれたり、気まずそうな顔を見せてくれたり、ぎょっとした表情を見せてくれたり、さまざまである。緊急時に備えておきつつも、同じ教室やフィールドで仲間と共に授業に参加し、対話をしながら高め合っていく、そんな毎日がずっと続いてほしいと願わずにはいられない。

(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)